

人 文 ・ 社 会 科 学

問 題 冊 子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に41の問題(1-41)があります。配点は80点満点です。
解答カードには表のみ50の解答欄がありますが、42以降は使用しないで下さい。
3. 解答のための時間は、正味80分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて80分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められた枠の中に鉛筆を用いてマークして下さい。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

2014年に芥川賞を受賞した柴崎友香に『きょうのできごと』という作品がある。本の裏表紙には「ある晩、友人の引っ越し祝いに集まった数人の男女。彼らがその日経験した小さな出会い、せつない思い。五つの視点で描かれた小さな惑星の小さな物語」という短い紹介文がそえられているが、それは小説のエッセンスをうまく捉えている。一日の出来事が登場人物それぞれの視点で淡々と描かれていて、とくに大きな出来事が起きるわけでもなく、深い心理描写があるわけでもない。描かれているのは、なにげない風景とさりげない感情の起伏だけで、要するに何も起きないのだが、じつはこの「小さな物語」こそが、私たちが「日常」と呼ぶものの本質をついている。本の末尾にある解説で保坂和志は、ジム・ジャームッシュ監督の映画『ストレンジャー・ザン・パラダイス』が「もたらしたショックを正しく、真っ正面から受け止めた小説家」として柴崎を位置づけ、ジャームッシュのこの作品以後の時代に生きる私たちは「未来に対して希望も持っていないけれど絶望も感じていない」と述べている。

それは確かに柴崎の小説世界にも通じるモチーフで、ジャームッシュや柴崎は[A]と言えるだろう。昨日に続いて今日があり、明日になればまた別の日がやってくるという意識——と言うよりも、それは意識されることなく受け止められている[B]なのだが——を私たちはどこかで共有している。もちろん、事件や事故に巻き込まれば、それは一瞬にして崩れる。しかし、よほどの悲観論者でもない限り、私たちは今日とさほど変わらない明日がやってくることを疑わない。疑いが生じた時点で日々の時間の流れが妨げられる。それに、そもそも今日や明日がはっきりと分けられた時間として意識されているわけでもない。たとえば先にあげた『きょうのできごと』には、登場人物の二人が、「いつから明日になるのか」という点をめぐってやり取りをする場面がある。小学生のころ、12時に日付が変わることを知らされて衝撃を受けたが、それが未だに感覚的に受け入れられない登場人物の一人は、「いまだって夜中の三時やけど明日じゃないやん、今日は今日や」と述べ、次のように続ける。「でも、どっちかっていうと、今日と明日のそんなはっきりした境目ってあるんかなって感じかもしれへん。終わり、はい、次、っていうのが」。なにげない会話だが、それは私たちが抱いている日常感覚の本質をよく表している。日常は、今日から明日へと続く平板な時間の流れとして意識され、そこに大きな変化が存在しないことがあらかじめ仮定されている。

柴崎の小説には先行する作品群がある。斎藤美奈子は、90年代後半には「都市を浮遊する若者たちのよるべない日常を描くのが文学のひとつのトレンドになった」として角田光代をトレンドの先駆者としてあげている。たしかに角田の「まどろむ夜のUFO」には、登場人物たちの曖昧な関係と平凡な日常が描かれているだけで、とくに大きな出来事が起こるわけではない。UFOの存在を信じる弟が、夏の間だけ主人公のアパートに居候することになって彼女の生活に多少の波風が立つものの、弟が実家に帰ったあと彼女の暮らしが平穏さを取り戻していくことを暗示するエンディングになっている。「よるべない」と評される若者たちの日常は、

漫画の世界にも通底している。その先駆けとなった岡崎京子の漫画『リバーズ・エッジ』は、非日常的な事から（河原の死体など）に接することでかろうじて生きている実感をもつことができる若者たちを描いて多くのファンを獲得した。河原の死体は、なにも起きない日常に忍び込む死を描いていると一般的には思えるだろうが、しかし登場人物たちはその傍らでごく普通の会話と生活をくり広げていく。つまり、そこに描かれているのは非日常的な出来事（河原の死体）のようであり、じっさいにはそれと鏡像関係にある変化のない日常なのだ。作者の岡崎が、雑誌『クリーク』のインタビューに答えて、ほんとうに怖いのは「世界が終わる終末思想」ではなくてむしろ「終わらない世界」なのだと述べていることは、時代の雰囲気象徴的に表している。終わらない日常を描いた『リバーズ・エッジ』もまた90年代の空気をすくい取ったものだった。淡々と描かれる日常という作風は、ここで紹介した小説や漫画にとどまらず、平田オリザの演劇などにも共通するもので、いずれも90年代に登場したことはやはり注目に値する。ジャンルはなんであれ、時代の変化に敏感な作家やアーティストがひとしく日常に目を向けた90年代、それは今に続く「日常志向」とでも言うべき現象の始まりを告げていたのだ。

日常を志向する傾向それ自体は、いつの時代にもある。社会学者のピーター・L・バーガーとトマス・ルックマンは、1966年に出版した本で日常生活に注目することの重要性を説いていた。彼らは、日常を問題化することを社会学の課題としてあげたわけだが、当時それは斬新な視点だった。と言うのも、人々の間にはもともと秩序を求める心情があり、日常からの逸脱を避けたい思いがごく自然に湧いてくることにとくに問題はないと一般的には考えられていたからだ。しかし、バーガーとルックマンにとっては、そうした一般的な理解こそが日常にひそむ盲点を示すものだった。彼らは、自然なものとして私たちの前に立ち現れる日常——彼らの場合、それは「現実」と言い換え可能な言葉として用いられている——が、実際には社会的に構成されていることを指摘した。つまり、日常とは歴史的なプロセスを経るなかで今ある状態に作り上げられてきたということなのだ。それにもかかわらず、私たちはたいていの場合、そのことに気づかずに生きている。私たちにとって日常生活は、一貫性をもち、それほど変化のないものとして意識されるだけでなく、逆にその意識が私たちの日々の行為にある特定の意味付けをするという認識は、冒頭で述べた90年代以降の状況を考える上でおおいに参考になる。

ここでもう一度、90年代に登場した小説などの作品を思い起こしてみよう。「終わらない日常」という意識が社会的に共有されていたからこそ、それをテーマにした作品が評判となり、こんどは逆にそれらの作品が人々の意識を強化することにもつながったと考えることもできそうだ。研究者や評論家の間にも、社会現象としての「日常志向」が一般化したのは90年代後半からという意見が広く共有されている。バブル経済が破綻したあおりで企業の倒産が相次ぎ、若者にとっては就職が覚束なくなり、会社の中堅をになう人々にとっても年功序列制度の見直

しが始まるなど、それまで当然視されていた未来に暗雲がたれ込め始めた 90 年代に、日常志向が強まったと考えれば一定の説明はつく。しかし、経済の悪化だけがその要因であったとするには多少無理がある。経済的な状況が人々の心理に影響を与えたことは事実だが、それだけでは社会の広範囲に見られる現象を説明できない。

たとえば、90 年代以降に加速化した監視社会化が、じつは日常志向と同時進行してきた事実をどう考えればいいのか。考えるための糸口は「日常」という言葉の使い方にひそんでいる。じつは「日常」という言葉にはもう一つの含意があるのだ。試みに手元の国語辞書をひも解いてみると、たとえば「ヒッピー」は「既成の社会通念や生活様式に反撥し、『自然に返れ』をスローガンに日常的でない（反社会的な）行動をとった若者たち」として定義されている。ここで注目したいのは、「ヒッピー」の定義そのものではなく、解説で使われている「日常」という言葉の使い方だ。日常的でないことは「反社会的なもの」とされていることに注意しよう。「日常」は、当初から「反・反社会的なもの」という意味を含んでいることが辞書の定義から分かる。つまり、社会通念に照らし合わせると、日常的でないものは反社会的であり、したがって場合によっては排除すべきであるという価値判断が辞書に書き込まれているのだ。建前としては客観的な定義を標榜する辞書ではあっても、それが執筆当時の社会的文脈から完全に切り離されているわけではない。辞書を執筆するさいに、執筆者たちが生きる社会の通念がそこに書き込まれていることはおおいにあり得ることだ。先に述べたバーガーやルックマンも「言葉は常に日常生活の方を志向しつつづけている」と述べている。言い換えると、日常はつねに参照点として機能し、その基準から外れるものは「非日常」として定義される仕組みが、すでに言葉のなかに織り込まれているということだ。

どうやら日常は、さまざまな社会通念を飲み込んで構成されていて、ときには私たちの日々の行動を規制する力を及ぼしていることが分かった。ここでもう少し踏み込んで考えてみることにしよう。日常は、時間概念として、また空間概念としてとらえることができる。時間という点では、すでに述べたように、大きな変化がない平板な時間の流れとして日常が意識されていることを押さえておく必要がある。「終わらない日常」は一貫性をもつものとして、ある意味で永遠の「今」として感知される。[C] に構築されてきたにもかかわらず、日常は [D] なものとして私たちの前に立ち現れるということだ。90 年代以降の小説は、そこには夢も希望もなければ、絶望や挫折もないものとして日常を描いてきた。そこにおいて主人公は、一見クールに日々の出来事に対処していくが、しかしそれは皮肉な見方をすれば、日々の小さな出来事がすべて日常の範囲内で起きるからこそ対処できているとも言える。それらは、日常につかの間の揺らぎをもたらず程度の小さな出来事の連続であって、もはや出来事と呼ぶべきものではないのかもしれない。

それは裏を返せば、出来事は日常の〈外部〉で起きるものとして認知されていることを示唆

する。先にあげた角田光代の「まどろむ夜の UFO」は、UFO や宇宙人の存在を信じているらしい弟の登場で主人公の生活に微細な変化が生じる小説だった。角田の別の作品「もうひとつの扉」は失踪したルームメイトをめぐるストーリーが展開して行く。話題にはなるが決して登場することのないルームメイトや UFO は、主人公の日常の〈外部〉に存在するもので、むしろ彼女たちの暮らしの輪郭を浮かび上がらせるための小道具として使われている。輪郭とは言ってもそれはきわめて曖昧なもので、主人公たちの日常に明確な境界線は存在しないし、登場人物たちの生い立ちや性格がきちんと描かれている訳でもない。彼女や彼らの日常は、外部に存在する物や人が暗示されていることで、かろうじてその存在感を保っている。

さて、いま私は不用意に〈外部〉という言葉を使ったが、少し説明が必要だろう。先に述べた空間概念としての日常が役に立つ。これまで言及してきた小説が描き出す世界は、主人公の身の回りに限定される狭いものであることに特徴がある。それはある種の親密空間なのだが、家族の存在が希薄なことが興味深い。かりに家族が登場することはあっても、たとえば「まどろむ夜の UFO」に登場する姉と弟のように、意思の疎通がかろうじて成り立つ程度の関係として描き出される。二人がどういう家庭で育ったのか、どんな性格なのかは最後まで分からないし、過去はおろか現在の風景が詳しく描写されることもない。これらの現代小説がどこかカフカの小説を思わせるのは、人や物や風景が具体的なイメージとして把握できないことが多いからかもしれない。

日々の輪郭が曖昧で、存在感が希薄な主人公を描いた小説世界が、読者の日常と重なり合って共感と呼ぶ。それが一過性の現象であれば、とくにここで議論する必要もないだろう。しかし、日常志向が一種の社会現象になっているとすれば、それなりに分析する必要がある。パーガーやルックマンによる知識社会学の理論をひいて、日常は社会的に編成されているということはすでに述べた。では、日常が編成されるということは、具体的にどのような事態を意味するのだろうか。私たちは日々の暮らしを営んでいく上で、周囲の事物の意味を読み解き、ときには意味を与えながら生きている。たとえば、暴力的で不可解な事件あるいは事故が起きたでしょう。身近な場所で起きていれば、それは人々に不安をもたらし、平穏な日常に亀裂をいれる。不安を払拭するためには、さしあたって事故や事件の意味を読み解く必要がある。たとえばそれが凶悪事件であれば、誰がどういう理由で犯行に至ったのか、そして警察や行政機関は事件にどう対処しているのかといった事細かな情報を得ることができれば、とりあえず安心できる。その意味を読み解く作業においては、言葉やイメージが不可欠な要素となる。

ここで問題にすべきことは、どのような回路を経てそれらの言葉やイメージが供給されているかということだ。通信技術が高度に発達した現代社会にあっては、メディアが主要な回路となっていることに異論はないだろう。新聞、テレビ、インターネットによって日々拡散されていく言葉やイメージによって、私たちは事件を読み解き、納得し、安堵する。言い換えると、

日常に開いた亀裂を、メディアの言葉やイメージが埋めることで、私たちの日常は回復される。つまりメディアは、日常の綻びを修復し、維持する〈装置〉として機能しているわけだ。たとえばテレビのドキュメンタリー番組は、無数にある事実から一定のものを選び出して並び替え、さらにナレーションや効果音、ときには音楽を加えて番組を編集する。それはもはや素のままの事実ではなく、一定の効果をねらって物語化された「事実」なのだ。ニュースは、ドキュメンタリーほどの脚色は加えられていないが、時間に限りがあるために使う題材も制限される。ニュースもまた編集を経て発信される物語なのだ。したがって、テレビは単に情報を伝達する装置ではない。私たちは日々の暮らしのなかで、メディアの言葉やイメージを介して世界や身の回りで起きる出来事を理解し、自分の立ち位置を確認している。そして、これはあまり意識されることはないが、私たちはメディアによって新たな意味を与えられた世界—それは、編集された出来事という点において、ある種のフィクションだとも言える—を客観的に存在する「事実」として認識している。

メディアは単に情報を伝達するだけではない。たとえそれがニュースではあっても、それは現実を切り取り、編集作業を加えることで、作り上げられた番組の一種であることに注意する必要がある。さらに、それを個々の番組制作者の資質の問題として片づけるのではなく、報道メディアが陥りがちな構造上の問題としてとらえる必要があることも指摘しておく。まず理解すべきことは、客観的な報道をうたい文句にしがちなニュースには、現代社会の不均衡な権力構造があらかじめ書き込まれているということだ。ニュースは、取材現場から視聴者の元へ送り届けられるまでのさまざまな回路を経るうちに加工される。私たちは、報道番組が認識をめぐる交渉や抗争のはてに生まれるものであることに注意をはらう必要がある。センセーショナルなニュースばかりが目を引きがちだが、じつはメディアはもともと日常性を志向するものだ。報道の価値があると判断された出来事は、それがどんなに非現実的であっても、ニュース番組編成のプロセスを通過するうちに日常の言語に翻訳し直され、誰にとっても理解し易い「物語」として編集される。

たとえば、2011年の夏以降に多く見られた東日本大震災の後追い番組を具体的な例として考えてみてもいいだろう。津波の映像にたまたま映り込んでいた生存者を探し出してインタビューし、「奇跡の生還」物語に仕立て上げる類の報道番組は、非日常的な大津波を題材にしながらも、実際には生還者が戻ってきた世界、つまり私たちが暮らしている日常に目が向いている。大津波のような災害を生き残った者たちの体験は、個々の出来事であることを越えて、日本社会全体の復興の物語として編集されていく。集団的記憶の編成に、メディアが大きく関わっていることはすでに多くの研究者たちによって指摘されている。ダヤーンやカツが提唱した「メディア・イベント」もその一つだ。彼らは、特定の出来事がメディアによって「メディア・イベント」として物語化され、繰り返し報道することによって、人々の記憶を一定の方向

に水路づけることを指摘した。私たちは過去の出来事を振り返る際に、メディア・イベントという〈点〉をつなぎ合わせて語ることがある。相手方との共通点を見つけて会話を進行させるためには、多くの人の記憶に残っている出来事を参照し、自分や相手の当時の記憶をたぐり寄せることが不可欠な作業となる。それはつまり、〈点〉と〈点〉がつなぎ合わさった〈線〉として自分や社会の歴史を編集し直す作業だとも言える。メディアは、私たちの記憶の編成にも大きくかかわっているのだ。すでに述べたように、メディアは非日常的な出来事を私たちの生活空間の〈外部〉に押しやることで、日常を確認し、修復する〈装置〉として機能する。日常を安全なものとして想定し直すには、非日常という〈鏡〉が必要だということだ。今その役割を果たしているのは、すでに過去のものとして語られ始めている東日本大震災のイメージだ。それは地震や津波による甚大な被害を乗り越えて、今の私たちがいるという感覚を植えつけることにつながっている。そして、それは同時に、現在進行形の問題、今も汚染物質を排出し続けている原発の状況を背景に押しやる働きをしている。メディアは、すぐれて忘却の装置でもあるのだ。

メディアの言葉やイメージは、しばしば私たちの現実認識のあり方を規定し、共通の社会意識を編成していく。それはときに「世論」として明確な形をもつこともあるが、多くの場合は「空気」とでもいうべき、ゆるやかに共有された感情のようなものが醸成されていく。意識の編成とはいっても、それはあからさまな強制をとまなうものではないから、自分では気がつかないことが多い。その例として、人が無意識のうちにもつ差別意識を思い起こしてみるといいだろう。一時期メディアによく取り上げられた「外国人による犯罪」の報道は、その差別意識の結果でもあり原因でもあった。同じ事件ではあっても、それがたまたま外国人による犯罪であった場合、その事実だけが強調して語られることが多かった。現場での取材で「言葉が変だった」「ゴミの捨て方が分かっていない」といった付近住民の声を集め、現場付近の映像に暗い音楽をかぶせて編集することで特定の犯人像を浮かび上がらせるという手法がとくに目立った時期があったが、それは「彼ら（外国人）」を〈鏡〉として、それとは区別されるべきものとして意識される「私たち（日本人）」の像を映し出す。結果的にそれは、陰惨な事件が起きはしたが、それは「他者」による一過性の事件であり、私たちの平穏な日常に一瞬だけ開いた亀裂のようなものであると印象づける。他者が住む非日常的な世界と私たちが住む日常的な世界。メディアはしばしば分かりやすい二元論的な世界観を提示するが、それはときに緩やかなナショナリズムの形成につながって、外国人差別の言動をあおることにもつながった。当時の東京都知事による差別的発言はまだ記憶に新しいが、すでに多くの人が言及しているのでここでは触れないことにする。

ナショナリズムという明確な形ではなくても、同調を求める圧力は、私たちの身の周りでとくにマジョリティにとってはそれが意識されることもなく一つねに作動している。同調圧力

は、制度化された日常に監視の目を光らせ、ときに暴力として襲いかかってくる。平板な時間の流れとして、あるいはリスクの少ない空間として意識される日常。しかし、実際には日常とは、このようにさまざまな〈力〉が作動する場でもある。そのことを理解すると、逆に、日常がなぜ変化のない、平板な時空間として意識されているのかということも理解しやすくなる。原発事故の後を受けて、市民の間にひろがる無関心、というよりもたぶん諦観とでもいうべきものの存在が多くの人によって指摘されてきた。私は、問題の根底には社会全体に浸透しつつある「現実主義」があると考えている。現実には、本来いくつもの層があるはずなのに、ある特定の「現実」だけが、それ以外にはあり得ないものとして捉えられてしまうことを問題にしたのは政治学者の丸山眞男だった。丸山は「現実が所与性と過去性においてだけ捉えられるとき、それは容易に諦観に転化」として喝破した。丸山はまた、現実とは「本来一面において与えられたものであると同時に、他面で日々造られて行くもの」であるとも述べている。いわゆる現実主義者とは、前者の意味においてのみ「現実」をとらえる者のことをいう。そこにおいては、現実が既成事実と取り違えられ、誰かがそう定める「現実」が自然なものとして映り、変更不可能なものとして立ち現れる。そこに疑いを差し挟むことの困難さはこうして生じる。現実と言い、日常とは言っても、それが作り上げられたものであることを知ること、さらに日常を構造化し、私たちの意識や行為を決定づける不可視の〈力〉があることを理解することの重要性はそこにある。

不可視の力はさまざまな回路を経て私たちに作用する。たとえば、「自分らしさ」の探求にこれほど多くの時間とカネとエネルギーがさかれているのは不思議なことだ。自己啓発本の氾濫、テレビ番組やネット上のサイトに多い自己発見マニュアルや占いの類、就職活動の際に応募者に課せられる「自分について述べよ」という質問など、さまざまなところで私たちは自分に向き合わざるを得ない場面に遭遇する。窮屈なら窮屈なりに、人はたいていの場合、置かれた場所に身の丈を合わせてしまう。「自分らしさ」が至高の価値であるかのように喧伝される一方で、同じ言葉を用いて同じように思考することをその成員に強いてはばからない〈疑似共同体〉が生まれることがあるが、その一因はわれわれの側にもある。「共生」という耳あたりのいい言葉が流通しているが、メンバーと認められたものにしか共生を許さない社会は、全体主義とさほど変わらない。他者の違いを認めつつ共振する道を探ること。表面的な言葉のみが踊る「多文化社会」や「共生社会」の陰で排除されていく人々に思いを馳せることがやはり重要なのだ。

もう一つ、例をあげてみよう。本来は個人に関して使われるべき「アイデンティティ」という言葉は、集合体のアイデンティティとして誤用されることが多い。日本人としてのアイデンティティなどという表現がそれにあたる。成果を上げたスポーツ選手を褒め称える報道のなかで、「日本人の良さが出た」とか「サムライ精神が云々」といった言葉が飛び交う様を見たこ

とがあるだろう。そこには、そもそも「日本人」と発話した瞬間にそこからこぼれ落ちていく人々、たとえば在日の人々に対する配慮がみじんも感じられない。すぐれて個のものであるはずのスポーツ選手の身体が、共同体の特質によって好成績を残すということはちょっと考えてみれば根拠のない話なのだが、メディア空間においては「日本人」という言葉がじつに無造作に使われている。そこでは、スポーツ選手と視聴者一人ひとりの身体が「日本人」という括りによって結びつけられ、ある種の〈疑似共同体〉が生まれていく。そこには私的な問題をはるかに越えた問題系（権力、資本、ジェンダー、階級などが複雑にからみ合った、意味をめぐる抗争の場）の存在があるのだが、ここでは資本の問題を取り上げて考えることにする。ケータイやスマホなどのパーソナル・メディアの登場によって、私たちは狭い生活空間から解き放たれ、自由にグローバルな空間に参入する道が開けたとする見方がある。一方的かつ大量に情報を送りつけてくるマス・メディアと異なり、どこにいてもネット空間にアクセスして情報を取捨選択して得ることができること、さらに使用者の側から情報を発信できるという特色に大きな期待が寄せられてもいる。ソーシャルネットワーク・サービス（SNS）の盛況ぶりを見れば、人々は確かにその恩恵を享受しているように見える。一面では確かにそういうこともあるだろうが、ここでは別の角度からパーソナル・メディアの発達を批判的に検証してみよう。

ジョシュア・メイロウィッツは、メディアの発達によって、私たちの社会的環境が大きく変容したことを指摘した。これまでは物理的な位置関係（互いの距離など）が対人関係のあり方を規定していたが、それが今では社会的意味を失ってしまったとする彼の指摘は重要なものだ。しかし、メイロウィッツがそう書いたとき、彼は固定電話やラジオやテレビを念頭においていた。パーソナル・メディアが発達した今、私的領域への浸透度という点においては、それまでのメディアとは比較にならないほど大きな変化が起きている。電話を例にとってみても、たとえば固定電話しかなかった時代において一家団欒の場に外から電話がかかってきた場合、受け手以外の家族にとってそれは家庭という親密空間への〈侵入〉として受け止められていた。ケータイやスマホが主流となり、今や私たちはメディアを肌身離さず持ち歩くようになった。それは空間の把握という点において、私たちの生活に決定的な変化をもたらした。かつては外部から私的空間へと向かっていたコミュニケーションのベクトルが、今では逆に私的空間から公的空間、あるいはもう一つの私的空間に直接に向かうようになった。ケータイの登場によってプライベートな世界を公共空間のなかに成立させることが可能となったとする富田英典の指摘、そしてそのこと自体が公共空間の存在を脅かすものではなく、現在では「むしろ再構築された公共空間のなかでの私的空間の漂流である」ととらえるパトリス・フリッシーの指摘は、私たちの周りで今なにが起きているのかを考える上で示唆に富むものだ。

ケータイやスマホによって私的空間ごと移動可能となった今、公共空間という場にいる感覚はおそらく希薄になっている。公共の場におけるケータイ使用がいまだに問題になったりもす

るが、それをマナーやモラルの問題としてとらえてしまつては、私たちの社会や身体に起きている大きな変化を理解できないだろう。どうやらパーソナル・メディアは、本来の通信手段という枠を超え始めている。それは私たちの身体の一部となつて、どこにいても安全・安心な私的空間を約束する装置、もう一步踏み込んで言えば、ある種の〈防護服〉として機能しているのではないだろうか。もちろん、まったく逆のことも同時進行している。GPS（全地球測位システム）などの機能が付加されることによって、それが一種の監視装置としても機能していることを忘れてはならないだろう。通話記録を調べれば使用者の行動パターンがある程度読めるし、頻繁に交わされる位置確認の会話やメール（「今、どこ？」）は当然のことながら使用者の痕跡を空間上に残していく。それが、国家や通信会社による監視を容易にすると危惧する声があるのもむしろ当然のことだろう。

パーソナル・メディアの発達をもたらした変化で忘れてならないことは、資本あるいは市場と個人との関係における変化だろう。試みに手元のパソコン、あるいはスマホで情報検索を試みるとよい。あるいはフェイスブックを開いてみてもいい。画面の片側あるいは両脇に広告が映し出されるはずだ。それは見事に使用者の趣味や嗜好と合致していることが多い、それもそのはずで、その人のパーソナルデータ（年齢、職業、住所など）やその人が過去にアクセスしたサイトの情報がデータ化され、「プロフィール」として流通し、企業や業者はそのデータをもとに直接個人に広告を発信している。つまり、こういうことだ。かつて私たちは品物を購入する際には市場に出かけたが、今では市場の方が個人の私的空間にまでやって来る新しい事態が起きている。それを進歩と考えるか、資本と身体が直接結びつく新たな消費社会の到来として警鐘をならすのかは、意見が分かれるところだろう。しかし、日常空間における大きな変化が、メディアを検証することなしには説明できないものであることだけは、はっきりしている。

ここにはある〔 E 〕がある。一方で人々の間に日常志向があり、変化のないことがむしろいいことだと感受される状況がある。冒頭で触れたように、90年代に登場した小説の流行はそのことを示唆するものだった。しかし、他方で同時に進行していることは、まさにその日常空間で大きな変化が起きていることだ。それをどう説明すればいいのだろうか。端的に言うところには、これまでに述べてきた全ての変化の原因でもあり結果でもある、〈非政治的身体〉の登場がある。メディア研究者の伊藤守は、大衆の社会的役割が労働者から消費者へと大きく変容してきた歴史的状況を分析し、警鐘を鳴らした。彼によると、それは私たちの活動の舞台が消費の場に移るだけではなく、社会にコミットする方法が変わったことを示唆している。職場の外での自らの役割を消費者としてのそれに限定することは、政治的な〈場〉から退くことを意味するからだ。それは本論で述べてきたこととの関連で言えば、まさに日常への退却ということにならないだろうか。日常志向とはつまり、社会全体が内向きになっていく歴史的過程において、人々が意図的に、あるいは無意識のうちに選び取ってきた〈退路〉を意味するのかもしれない。

参考文献

- 伊藤守 (2005)『記憶・暴力・システム—メディア文化の政治学』法政大学出版局
- 岡田朋之 / 松田美佐編 (2002)『ケータイ学入門』有斐閣
- 角田光代 (2014)『まどろむ夜の UFO』講談社
- 柴崎友香 (2013)『きょうのできごと』河出書房新社
- ダヤーン、ダニエル / カッツ、エリユ (1996)『メディア・イベント—歴史をつくる
メディア・セレモニー』青弓社
- バーガー、ピーター・L / ルックマン、トーマス (1977)『日常世界の構成—アイデン
ティティと社会の弁証法』新曜社
- フリッシー、パトリス (2005)『メディアの近代史—公共空間と私生活のゆらぎ』水声社
- 丸山眞男 (2010)『丸山眞男セレクション』平凡社

次の問題（1－41）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。
各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを 1 つだけ選び、
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 ㉔

㊞ ㊟ ㊦ ㊧

-
1. この資料文のタイトルとして、最も適切なものはどれか。
- a. 90 年代の小説世界から見た現実社会
 - b. メディアがつくる権力政治
 - c. 日常を可視化する
 - d. 非日常志向への〈退路〉
2. 資料文 1 ページの空欄 [A] に入る語句として、最も適切なものはどれか。
- a. ショック以降の社会を丁寧に分析していた
 - b. 小さな物語を淡々と描いていた
 - c. 時代の精神をうまくすくい上げていた
 - d. 登場人物の意識の流れを辿っていた
3. 資料文 1 ページの空欄 [B] に入る語句として、最も適切なものはどれか。
- a. 茫漠とした不安で満ちた感覚
 - b. 根拠のない確信のようなもの
 - c. 希望と絶望の相半ばする思い
 - d. 友人同士で分かち合う連帯意識
4. 角田光代の小説における「UFO」や岡崎京子の作品における「河原の死体」について、
筆者の見方に最も近い表現はどれか。
- a. 変化のない日常にさざ波を立てる非日常
 - b. 終わらないと信じていた日々突然に突如持ち込まれる終末思想
 - c. よるべない若者たちの不安定さを示す指標
 - d. 日常の変わらなさを強調させるための参照点

5. 資料文 2 ページで使われている意味での「鏡像関係」として、最も適切な組み合わせはどれか。
- a. 小さな惑星と小さな物語
 - b. UFO の到来と終末思想
 - c. 津波災害と奇跡の生還
 - d. 親密空間とソーシャル・ネットワーク・サービス (SNS)
6. バーガーとルックマンの社会学について、最も適切な記述はどれか。
- a. 各種の構造がいかに社会全体を維持しているのかを解明する社会学
 - b. 社会が持つ独特の現実性が構成されるしかたを分析する社会学
 - c. 日常生活で使われる言語をそれが用いられる社会集団との関連において問題にする社会学
 - d. 哲学、文学、政治、経済、科学など社会のあらゆる分野にまたがる統一的な学問として構想された社会学
7. 資料文 2 ページで、筆者は「自然なものとして私たちの前に立ち現れる日常」には盲点があると指摘している。ここでの「自然」と同様の使い方がされている文章はどれか。
- a. 人間社会は、自然界における動物のそれと同じようなものではあり得ない。
 - b. そういう状況下において彼が取った行動は、男として自然なものだった。
 - c. これまでの彼女の行動からして、自然と敵も多くなった。
 - d. 多くの困難が予想されるが、それは自然に消えて行くだろう。
8. 筆者が「社会的に構成されている」とする「現実」として、最も適切な例はどれか。
- a. 認識をめぐる交渉や抗争を通じて編集された言説
 - b. 客観的な事実によって構成されたドキュメンタリー
 - c. 社会通念にとらわれない主観的な物語
 - d. 日常の〈外部〉に存在するフィクション

9. 「日常志向」が一般化した時代について、最も適切な説明はどれか。
- a. 戦後の復興を成し遂げ、安定したために目的を見失った時代
 - b. 日常が一瞬にして崩壊するのを目撃あるいは体験した時代
 - c. 日常が社会的に構築されていることが分析され示された時代
 - d. 経済の悪化によって日々の生活が苦しくなった時代
10. 90年代以降に顕著になったとされる「日常志向」化の原因として、筆者が考えるものはどれか。
- a. 戦後45年を経て経済成長を成し遂げ、その過程で個人主義が根付いたため
 - b. 経済や政治や文化の領域で起きた変化などの複合的な要因があったため
 - c. 20世紀の終わりを数年後に控え、人びとの間に終末思想が広がったため
 - d. 株や土地の値段が高騰していたバブル時代が終わりを告げたため
11. 「バブル経済が破綻した」帰結として、適切ではない記述はどれか。
- a. 物価上昇率は徐々に下降してデフレーション局面も見られたが、その後再び上昇して1990年代後半にはインフレーション傾向が強まった。
 - b. 回収困難な不良債権を大量に抱えた金融機関が新規融資に慎重になる「貸し渋り」が生じた。
 - c. 完全失業率が高まる傾向を見せて、2000年代初頭には戦後これまでにない5%台を記録した。
 - d. バブル期の増収によって減少していた国債発行が急増し、2000年代初頭には発行残高が国民総生産（GDP）を超えていた。
12. 筆者によれば「監視社会」とはどのようなものか。下記のうち、最も適切な説明を選べ。
- a. 防犯カメラが設置されて窃盗事件が少なくなった社会
 - b. ヒッピーを取り締まるための措置が講じられている社会
 - c. あらゆる手段を使って反社会的な要素を排除しようとする社会
 - d. 日常を守るために人々が自主的に行動規制をしている社会

13. 「ヒッピー」運動について、最も適切な説明はどれか。
- a. 60年代後半にアメリカでの反戦運動を契機に始まり、既存の社会のあり方を否定し、ドラッグや東方宗教などにインスピレーションを求めた。
 - b. 70年代にイギリスから世界中に広まった伝統的価値観を否定する運動で、ビートルズがその代表的存在である。
 - c. 60年代初期にニューヨークで始まり、文明を否定して自然回帰を主張し、自然保護運動のはしりとなった。
 - d. 70年代半ばに世界各地で始まり、ドラッグによる高揚を推奨したり、性の解放を主張して過激な社会変革を訴えた。
14. 「辞書」についての筆者の見解として、最も適切な文章はどれか。
- a. 辞書は客観性を重んじて編纂されるべきであり、編纂当時の文脈によって左右されない中立を目指すべきである。
 - b. 辞書は客観性を標榜していても、編纂当時の文脈から中立の存在ではありえないから、読解には注意が必要である。
 - c. 辞書の巻頭には当時の社会的文脈についての解説が書かれているので、まずそれを読むことが必要である。
 - d. 辞書は「日常」の言葉を集積したものであり、「非日常」の言葉は収録されない傾向がある。
15. 資料文3ページに「永遠の『今』」という表現があるが、これはどのような意味か。以下のうち、最も適切なものを選び。
- a. 過去は変更不可能で、未来は予測不可能だから、今を生きるしかないこと
 - b. 大きな変化がなく、今の状態が続いて欲しいとする願望のこと
 - c. 本来は非日常的であることが、日常に織り込まれる状態のこと
 - d. 事件や事故がなく、穏やかに時が流れる安定した日々のこと
16. 資料文3ページの空欄[C]と[D]に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものはどれか。
- a. C：歴史的 D：非歴史的
 - b. C：多面的 D：一面的
 - c. C：概念的 D：具象的
 - d. C：完璧 D：不完全

17. 資料文 4 ページのカフカについて、最も適切な説明はどれか
- a. ロマン主義の作家で、シュールレアリスムの作風で一世を風靡した。
 - b. 自然主義の作家で、不条理な世界観を冷徹に描いた。
 - c. ポストモダニズムの作家で、抽象的な作風で文学界に新風をもたらした。
 - d. ユダヤ人作家で、その実存主義的作風はサルトルに高く評価された。
18. メディアについて、筆者の考えに最も近い文章を選べ。
- a. 個別の出来事に関連づけて編集し、意味付けを行なうことによって、権力構造を排除しようとする。
 - b. 外部を鏡とすることによって日常を定義する、すぐれた情報伝達装置である。
 - c. 正しい情報を送り届けるために報道の現場で日々交渉や抗争が繰り返されているが、それは受け手に隠されている。
 - d. 日常を乱す要素を排除する言説を送り出すことによって、受け手の中に他の社会成員との疑似的な一体感を紡ぎだす。
19. ドキュメンタリー番組の問題点として、ニュース報道と共通すると筆者が指摘するものはどれか。
- a. 時間的制約はあるが、客観的な事実に関する情報や題材が伝達される。
 - b. 編集作業を経るうちに新たな意味を与えられる。
 - c. センセーショナルな題材を取り上げることで日々に刺激や変化をもたらす。
 - d. ナレーションや効果音、目を引く非現実的な編集が信憑性に欠ける。
20. 報道メディアが陥りがちな構造的な問題として筆者が指摘する、最も適切なものはどれか。
- a. 実際に起きたことの一部分だけを取り上げて報道する〈装置〉として機能する。
 - b. 個々の視聴者の日常生活とは関係のない出来事を取り上げることが多いので、すぐに忘却される。
 - c. 個人の経験をつなぎ合わせて、社会の構成員全体の意識や記憶に仕立て上げる。
 - d. 不十分な情報を補うために、番組制作者が自らの主観を交えて編集することが多い。

21. 資料文 5 ページで言及されている「メディア・イベント」が持つ効果と似たものを描いている俳句はどれか。
- a. 秋深き 隣は何を する人ぞ
 - b. 赤い椿 白い椿と 落ちにけり
 - c. 古池や 蛙飛びこむ 水の音
 - d. 海に出て 木枯らし帰る ところなし
22. 資料文の筆者の「日常／現実」観と認識を共有していると考えられる言葉は、次のうちどれか。
- a. ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という言葉
 - b. プラトンの「民主主義は専制政治に陥る」という言葉
 - c. デカルトの「我思う、ゆえに我あり」という言葉
 - d. 老子の「柔能く剛を制し、弱能く強を制す」という言葉
23. ナショナリズムについて、資料文の筆者の考えに最も近いものはどれか。
- a. スポーツ競技などを通じて他の国と競うことは、実際に戦争をすることの代替としてはるかに健全である。
 - b. 社会が内向きになっているのは、自国への誇りが薄れているからであり、学校教育で提供されている自虐史観に問題がある。
 - c. ナショナリズムは虚構の人種感覚を根拠に、自国民と外国人とを分離しようとする。
 - d. マジョリティへの同調圧力がある中では、極端なナショナリズムは育まれない。
24. 資料文 6 ページにある「同調圧力」について、最も適切な記述を選べ。
- a. 多数決を求められる場面で発生しやすい。
 - b. 全会一致を求められる場面で発生しやすい。
 - c. 多様な利害関係者との対話過程で発生しやすい。
 - d. 多数派にあえて反対する立場が存在することで発生しやすい。

25. 資料文7ページの「現実」について、丸山眞男と共通する見解からの国際関係観は次のうちどれか。
- a. 人間の本质について性悪説をとり、世界政府がない国際関係はアナーキーで、「万人の万人に対する闘争」になる。
 - b. 国際関係はアナーキーだが、政治家や外交官の力量ではなく権力の分配構造の現実によって存立状況が決まる。
 - c. 国際関係はアナーキーだが、絶対的利得を優先する諸国家は国際制度を通じて協調することができる。
 - d. アナーキーは国家が作り出すものであり、「権力政治」という概念自体も同様で、人間による変革で変更可能である。
26. 「自分らしさ」という言葉に対して筆者が抱く思いに最も近いものは、次のうちどれか。
- a. 「自分らしさ」を盛んに問うことによって、社会は一定の人間像に私たちをはめ込もうとしているのではないか。
 - b. 自己啓発本などは自己と向き合うことをマニュアル化しており、アイデンティティの確立という難しい作業を容易にしている。
 - c. 「自分らしさ」は本来共同体においてはさしたる価値がないものであるが、昨今の風潮はそれを過大評価している。
 - d. 「自分」と「他者」の共生のためには、まず「自分らしさ」を理解することが不可欠であり、その思考は常に求められる。
27. 資料文7ページで筆者は「共生」について「耳あたりのいい言葉」と述べているが、それはなぜか。
- a. 不協和音を発する者を排除する仕組みを隠蔽しているから
 - b. 多様性に対して寛容であることを評価しているから
 - c. 様々な人に支えられて生きている自覚を持っているから
 - d. 多文化の影響を受けた音楽や言葉は、複雑な響きを持っているから
28. 資料文7ページの「アイデンティティ」について、筆者の考えは次のどれに最も近いのか。
- a. 人種は社会的に構築された幻想であり、「日本人としてのアイデンティティ」という語が使用される場合は批判的に見る必要がある。
 - b. 「日本人としてのアイデンティティ」は日本に住むすべての人々を包含するものであるべきである。
 - c. 日本人のサムライ精神には礼儀正しく忍耐強い特質があるが、他の民族にもその特質を持つものがあることを認めるべきである。
 - d. メディア空間では、国家・国民とアイデンティティを結びつけることは無意味である。

29. 資料文 8 ページの〈疑似共同体〉について正しく説明した文章は、次のうちどれか。
- a. 真の共同体は現実の身の周りに構築されるものであり、メディア空間に構築されるものは疑似的な共同体に過ぎない。
 - b. 共同体に存在するアイデンティティは多種多様なので、一つの共同体にはなりえない。
 - c. スポーツ観戦などで育まれる共同体意識は、視聴者の私的空間と公的空間とを接続する可能性を持つ。
 - d. スポーツ選手と各視聴者は別個の身体であるにも関わらず、あたかも同じ資質を持つものであるかのような幻想がメディアによって育まれる。
30. 資料文 8 ページにあるメイロウィッツの指摘を表現した語句として、最も適切なものはどれか。
- a. メディアはマッサージ
 - b. 古いメディアが新しかった時
 - c. 国家管理の通信
 - d. 場所感の喪失
31. 資料文 8 ページで言及されている「再構築された公共空間のなかでの私的空間の漂流」の原型の一つと考えられる事例はどれか。
- a. 北京の天安門広場に掲げられた毛沢東の肖像画
 - b. ロンドンのハイド・パークにあるスピーカーズ・コーナーでの演説
 - c. 観劇すると同時に、観衆からも見られるパリのオペラ座のボックス席
 - d. ニューヨークの地下鉄や駅構内に無断で描かれる「パブリックアート」
32. パーソナル・メディアの普及による変化に関して、筆者の意見に最も近い文章はどれか。
- a. 時間や空間に規定されないソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）などを通じて、より広い社会との親密なコミュニケーションを取れるようになった。
 - b. 使用者の嗜好に合わせた情報が送られてくるため、人々の消費スタイルが大幅に変化した。
 - c. 情報が親密空間に〈侵入〉する異質なものとしてではなく、受け手の都合に合わせて受け入れやすい利便性が生まれた。
 - d. 私的空間によって身の周りが固められるようになり、公的空間での交流は実質的に減少した。

33. 資本と個人の関係について、資料文の筆者が問題としているのは次のどれか。
- a. 資本のグローバル化が進み、労働力が国外に流出している。
 - b. 産業資本の機械化が進む一方で、熟練労働者が減少している。
 - c. メディア資本の台頭によって、個人情報とうまく管理されていない。
 - d. 資本と個人の関係は、全く新しい段階に達している。
34. 資料文 9 ページの「プロフィール」にある情報を取り扱う事業者が遵守すべき義務等を定めた法律は、下記のうちどれか。
- a. 特定秘密保護法
 - b. 個人情報保護法
 - c. 知的財産基本法
 - d. 情報公開法
35. 資料文 9 ページの空欄 [E] に入る語句として、最も適切なものはどれか。
- a. 命題
 - b. 疑念
 - c. 展開
 - d. 逆説
36. 筆者が言うところの「日常への退却」に抗する行動の事例に合致すると考えられるものを選べ。
- a. ソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）のオフ会に参加する。
 - b. ヘイトスピーチなど差別発言に反対するキャンペーンに参加する。
 - c. ネットショッピングではなく実際の店舗で買い物をする。
 - d. オリンピックやワールドカップで日本以外の国を応援する。

37. 資料文 9 ページで指摘されている「社会全体が内向きになっていく」ことの背景として、筆者が想定しているのはどれか。
- a. 現実が強力で変更不可能なものとして認識されていること
 - b. 経済の悪化によって、人々が積極性を失い行動半径を広げないこと
 - c. グローバル社会の到来によって、外国からの批判が増していること
 - d. 消費者としてのみ社会参加し、政治離れが進んでいること
38. この資料文の主旨として、最も適切な文章はどれか。
- a. パーソナル・メディアの発達によって人々の空間概念が変化し、「日常」が際限なく広がっているのを、その批判検討が急務である。
 - b. 他者を排除し日常性を担保しようとする動きが強まっているが、その「日常」が社会的に構築されていることを可視化することが社会の右傾化に抗するためには重要である。
 - c. 90 年代の「日常志向」は危機後の時代の不安定な社会を背景に登場したが、かつてのナショナリズムや相互監視などの全体主義的特徴を含んでいるとは言えない。
 - d. メディアの情報は事実ではなく再構築された価値判断を含んだものである。これを理解して受け取るメディア・リテラシーを持つことが現代に生きるものの責務である。
39. 下記の文は、資料文と類似するテーマについて作家の高村薫が論じたものである。

阪神と東日本の大震災は、[F] といった小さな物語として消費されてしまいがちですが、本来 [G] という大きな物語の方向に開かれるいい機会でした。人間の文明など、自然の力で一瞬にして押し流されることがある。そう気づいた以上、「私たちとは何者か」と語りなおすことによって、内向きの物語が外に向かって開かれる可能性があったのですが。結局、「復興」という美名を冠したあまたの物語にのみ込まれてしまっています。

(出典：朝日新聞、「耕論」、2014 年 4 月 22 日)

空欄 [F] と [G] に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものはどれか。

- a. F：「地域の災害」 G：「日本・世界の災害」
- b. F：「突然の悲劇」 G：「防災問題」
- c. F：「喪失と癒し」 G：「自然と文明」
- d. F：「被害者のそれから」 G：「日本人のこれから」

40. 下記の文は、資料文につけられた解説文の一部である。

この論文の背景には、近代の〔 H 〕という大きな物語と、それへの反発としての〔 I 〕の対比がある。〔 I 〕は大きな物語の正当性への懐疑を持ち、それへの対抗言説として個別性や地域性の主張を伴った小さな物語を志向する。男性中心主義への抵抗を示す〔 J 〕、西洋あるいは白人中心主義への抵抗を示す〔 K 〕などはその一つと見ることもできる。しかし、〔 I 〕を突き詰めると行き過ぎた相対化を招くとの批判もされている。

空欄〔 H 〕と〔 I 〕に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものはどれか。

- a. H：民主主義 I：社会主義
- b. H：資本主義 I：共産主義
- c. H：啓蒙主義 I：ポストモダニズム
- d. H：科学礼賛 I：自然回帰

41. 空欄〔 J 〕と〔 K 〕に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものはどれか。

- a. J：平和研究 K：レイシズム
- b. J：日本研究 K：オリエンタリズム
- c. J：開発研究 K：モダニズム
- d. J：ジェンダー研究 K：ポストコロニアリズム